



子供たちを私のもとへ来させなさい

ViaTOR

VOL.003

祝 ヴィアトール祭 10月28日(日)

聖ヴィアトール修道会カナダ管区長 Fr. Claude Roy ご挨拶

親愛なる京都のヴィアトール教会のみなさまに、一言ご挨拶申し上げます。

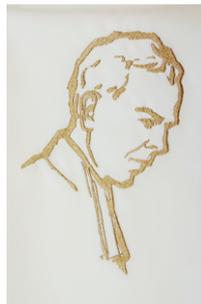
この教会は世界中に広がるヴィアトール修道会に属しています。それはフランスのリヨンに始まり、シカゴ、ブルキナファソ、コートジボアールなどにも広まりました。

ヴィアトール教会はヴィアトール修道会の経営ですが、それぞれ独自の言語、文化を持っています。しかし全ての教会に共通のものがあります。それは美しい典礼と、キリスト教教育に対する情熱です。

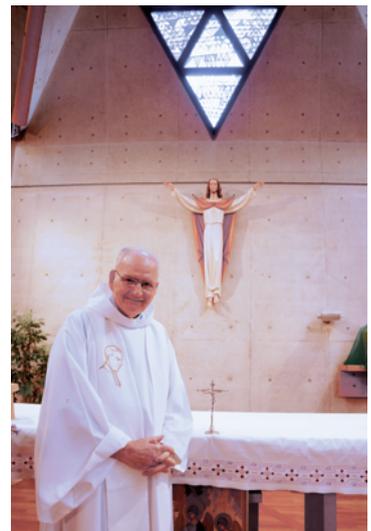
みなさまの熱心な活動のおかげで、この北白川教会は聖ヴィアトールのカリスマをよく伝えており、世界中のヴィアトール教会の模範となっています。この小教区に関わってくださっている皆様に心より御礼申し上げます。

また、日本で宣教50周年を迎えられたボアベール神父様にも深く感謝いたします。カナダ管区よりヴィアトール祭にあたって、修道会創立者であるケルブ司祭の肖像の刺繍入りストラを贈呈いたします。ケルブ司祭を思い起こすよい助けになればと願っています。

みなさま、今日は本当にありがとうございました。



ストラに刺繍された
ケルブ神父様の肖像



聖ヴィアートル祭にあたっての説教

聖ヴィアートル修道会カナダ管区長 Fr.CLAUDE ROY

兄弟の皆さん、神に照らされたルイ・ケルブ神父の思いを受けて、本日、聖ヴィアートル祭を祝います。聖ヴィアートルはフランスのリヨンの教会で朗読師として奉仕し、教区のユストゥス司教に忠実でありました。また教育者として、カテキストとして働いた人でした。このことから、ヴィアートルは信頼に足る人であり、神の御言葉を仕える人であったことがわかります。実際のところ、聖ヴィアートルは毎日、神の御言葉に養われていたのです。

ヴィアートルは私たちに呼びかけています。私たちに何を語っているのでしょうか。私たちは御言葉とどのような関わりがあるのでしょうか。生きている御言葉、受肉した御言葉、イエス・キリストの語った御言葉と私たちにはどのような結びつきがあるのでしょうか。これはじつによい問いかけだと思えます。というのも福音宣教は喫緊の課題であり、そのためにシノドス（世界代表司教会議）が開かれ、現在、議論が交わされているのです。

この課題についての抽象的な説明はさておき、福音書に耳を傾けてみましょう。福音書を見ると、盲人のバルティマイはイエスの方へと躍り上がり、イエスに癒され、ついに光を取り戻します。イエスのおかげでバルティマイは目が見えるようになり、生命の道へ向けて救い主に従おうと決心をするのです。福音書のこの物語は、福音宣教やキリスト者の生活を考える場合、抽象的な考えに基づくのではなく、キリストというペルソナに基づいて考えるように伝えているのです。

次にルイ・ケルブ神父について振り返ってみましょう。ケルブ神父は当時の教区の聖職者やヴィアートル会のカテキスタを考えて、「イエス・キリストを宣教する」という表現を考え、これを呼びかけたのです。この言い回しは実に正確で、またその時代の言い回しを取り入れ、大変に明瞭なものでした。ケルブ神父はその時代の若者に御言葉を運ぶ使命を与えたのです。

ですから、私たちヴィアートル会会員は、神の御言葉に心をしっかりと根付かせ、福音宣教を行わなければならないのです。神の御言葉は恩恵をもたらす慈雨であり、あたりをさわやかにするものです。御言葉は実りをもたらすもので、堅実な食べ物であり、美味なる蜂蜜であり、信仰を増し、キリスト者の共同体のメンバーを結びつけるものなのです。神の御言葉に耳を傾け、祈り、それを深く味わうとき、人となられた御言葉、キリストが私たちを訪れ、私たちのうちに宿られるのです。神の御言葉は私たち一人一人のうちに、私たち共同体のうちに、キリストによって伝えられた生命の力を発散させるのです。

ヴィアートル会の管区長会議は皆さんに手紙を送り、神の御言葉を教会共同体の活動や出会いの中心とするよう呼びかけています。ヴィアートル会会員にとって、神の御言葉に立ち戻り、それを中心とする集いを作り、信仰を分かちあい、共同体として神の御言葉を読むことにもまして、優れたことはありません。そのような集いの中で、ヴィアートル会会員は自由に自分の思いを語り、兄弟のあかしに耳を傾けることができるのです。

兄弟の皆さん、毎日、神の御言葉を取りあげ、それを読み、祈り、共に深めようではありませんか。神の御言葉を何度も語り、それを運び、現代世界に伝えようではありませんか。このためにも、神の恵みを願い求め、ヴィアートル祭のお祝いを述べたいと思います。

来日50年の今日

主任司祭 イブ・ボアベール

聖ヴィアトールの祝日おめでとうございます。
私が日本に来たのは、50年前の8月26日でした。ちょうど台風が来ていて2時間着陸できず、羽田の上空を何度も旋回し、やっと空港に降り立ったのは深夜1時でした。台風による停電で真っ暗な道を、迎えに来てくれた修道院長と二人で車にゆられ、不安でいっぱい
の夜を過ごしました。しかし、次の日は見事な快晴！素晴らしいお天気のもと、京都までの景色を大いに楽しみ、大変うれしかったのを覚えています。

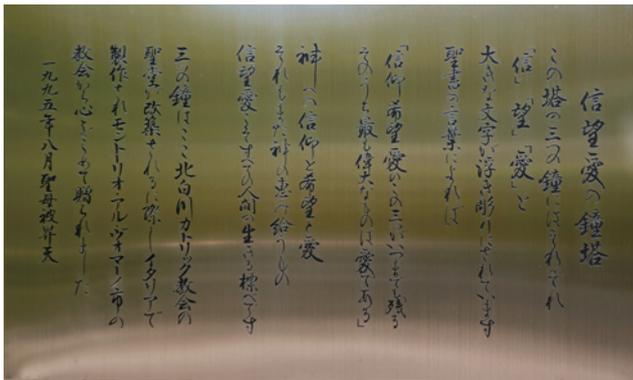
その時からもう50年。本当にみなさんのおかげです。感謝！！幸せとはまさにこのことです！

来日50年目の今年がちょうど信仰年にあたっていることは決して偶然ではありません。信仰と生活を一致させることが大切です。み言葉をよく噛んで味わうべきです。みなさんにぜひそれを感じてほしいし、体験してほしいと思っています。何事も刷新が必要です。私たちの生活も日々刷新しなければなりません。今日、キリストが私たちに伝えたいことは何か、聖書を通して探ることが大事です。福音を生き、活かし、述べ伝えることでキリストは見つかります。その模範となるように頑張ります。これからも教会の発展のために、みなさんの力が必要です。どうぞよろしくお願



50年前の若きボアベール神父様

いいたします。



信・望・愛の銘板が完成。鐘楼に取り付けられました。ご覧ください。



典礼部だより

洗礼式の場面に与る度に、私たちは自分自身の洗礼を思い起します。それぞれがキリスト者として歩む中で、感謝と讃美の祈りを捧げ心に大きな喜びを味わっています。日頃、信者特有の所作やその意味、由来や歴史に対して、意外に無頓着なことがあります。典礼部では初心に立ち返り、今一度、御聖堂の中での動作の知識を深め、その奥儀の尊さと偉大さに触れ、信仰生活を豊かなものにしていきましょう。前回の「十字架のしるし」に引き続き、今回は「聖水」の意味を学びましょう。※カトリック大辞典より引用

「聖水」

祝福の祈りで聖別されて、種々の宗教儀式に用いられる水。儀式で塩を溶かした水をよく使用した古代ローマの宗教やユダヤ教の慣習がキリスト教に取り入れられたらしい。古代教会では、祈りの前に、浄めの儀式として手や顔を洗う習慣が広まった。同じ目的で水盤が聖堂入り口に置かれるようになったのは4世紀以降のことと考えられる。当初は祝福されていない水が入っていた。聖職者は儀式の前に手を洗い、儀式中も洗った。信徒も聖体拝領の前に手を洗ったこともあったらしい。聖体を舌で拝領するようになってからは意味が失われたが、聖水は浄めの儀式の形で残った。

聖水の使用目的はさまざまである。教皇グレゴリウス1世は異教寺院をキリスト教礼拝所に転用するため、聖水を撒くことを勧めている。6世紀にはローマやスペインで家屋に撒いて祝福するため、塩を溶かして水を祝福する祈りができた。またアングロ・サクソンの地方には悪霊追放のために家に水を撒く習慣があったらしい。この使用法は10世紀までそれほど普及していなかった。後には毎年聖土曜日に水を家で祝福する行事が広まった。聖水は、祝別、奉献、悪魔祓い、埋葬、聖堂への入堂に際しての儀式的な浄めのために使われる。このほかミサの開始時の灌水式などで使われる。また、教会堂の入り口付近には聖水盤が置かれ、信徒は入堂の際、聖水に指を浸し、十字架のしるしをきる。その意味は、受けた洗礼の事実を思い出し、そのときに交わした約束の精神で心を改め、原点に帰ることにある。キリストが血を流して贖った自分の心身を浄めてから、神のみ前に近づくのである。

参考：御聖堂に入る際、聖水に指を浸し十字をきります。それは御ミサの前には「身を浄める」という意味です。ですから、御ミサを共に捧げ御聖体を授かった後は、聖水をつける必要はありません。また、御ミサの前だけでなく、御聖体訪問の時も「身を浄める」聖水で十字をきりましょう。次回は「聖体拝領」について掲載致します。

参考文献：ミサ（イエスを忘れないために） ドンボスコ 御受難会司祭 国井健宏
ミサを祝う オリエンス
ミサがわかる（仕え合う喜び） オリエンス 土屋 吉正
わかりやすいミサと聖体の本 女子パウロ会 白浜 満
オリエンス宗教研究所 御指導
神と共にある生活 パピルスあい 石井 祥裕

洛北ブロック夏期学校

去る7月21日、22日、西陣教会で洛北ブロックの北白川、高野、衣笠、西陣、小山の5つの教会の小学生24人が集まり、夏期学校を行いました。

夫神父様の「私たちは、みんな『キリスト人』です。つながりましょう。」というお話で夏期学校が始まりました。テーマは、「ぶどうの木とえだ」～イエスさまとつながろう～です。

合宿中『With Christ』という素敵な歌を何度も歌い、キリストにつながることを意識しました。プログラムは、楽しいものばかりでした。「ぶどうの木とえだ」の聖書の箇所を読み、キリストにつながるために自分はどんなことを実行したいか、どんな人になりたいかを考え、ぶどうの実のカードに書きました。このカードは、台紙に貼って大きなぶどうの房にして、2日目のごミサで奉納しました。

遊び時間にグループ対抗リレーをしたり、鬼ごっこやじゃんけんゲームをしたり、夕食のカレーの材料を切ったりしているうちに、普段、顔を合わす機会のない高野、衣笠、西陣、小山のお友だちともすぐに打ち解けました。同じ信仰を持つ仲間と過ごす時間は、いつもと違って特別に楽しいものと感じられたのではないのでしょうか。夕食後、天然温泉「金閣寺の湯」へGO！ととてもいいお湯でした。お風呂の後、衣笠教会でキャンドルサービスと北村神父様の司式でみ言葉の祭典をしました。子どもたちは、ローソクが少しずつ短くなりながらも、暗いお聖堂に明かりがだんだん広がっていくのを神妙な面持ちで眺めていました。心静かに神さまの慈しみを黙想しました。

その後は、お楽しみの花火をして、西陣教会に戻って就寝。女の子たちは、みんな直ぐに寝たのですが、男の子たちはかなり遅くまで楽しんでいました。

2日目は、朝食をいただいた後、グループ毎に共同祈願を作り、ごミサにあずかりました。司式は、北村神父様、お説教は、ブラザー菅原さんがしてくださいました。「生きているということは、つながっているということです。生きる全ての命は、イエスさまとつながっているから、素晴らしいことができるのです。また、一番つながっていないと思える時こそ、実は一番近くでつながっているのです。」とお話してくださいました。

ごミサの後は、子どもたちが一番楽しみにしていた堀川散歩。水深20cmほどの水の中をジャブジャブと気持ちよさそうに歩きました。いつまでも遊んでいたかったようですが、教会に戻って、



お昼にお素麺とおにぎりをいただいて、解散。

楽しく神さまのことを学び、すっかり他の教会のお友だちとも仲良くなった（つながった）2日間でした。

これからも子どもたちがいつも神さまと共に歩いて行けるように楽しい日曜学校にしていきたいと思います。

最後になりましたが、今回の夏期学校の参加費として北白川教会から一部を補助していただきましたこと、感謝申し上げます。

日曜学校担当マリア・フランシカ T.Y

中学生広島巡礼に参加して

夏休みに、教会の皆さんのご厚意もあり、母に勧められて広島巡礼に行ってきました。行くときには、不安だったけど、堅信の勉強で一緒だった人もいて少しホッとしました。韓国から来た中学生の人もいっぱいいて、ちょっと緊張しました。

巡礼に行く前に、学校の社会の宿題で、日本でも世界でもどこでも地理を調べてみる、というのがあったので、僕はせっかくだから、広島について調べてから行くことにしました。

原爆について知らなかったわけじゃなかったけど、あらかじめ調べていったお蔭で、実際に広島に行くとより深く感じたり、考えることが出来ました。思ったよりも、原爆ドームや原爆が落ちた時に人が折り重なって川にあふれていたという場所は狭く、小さかったです。

今は、とてもきれいで緑もいっぱいあって公園になっているところが、あの写真の場所なのかと思うと、不思議な感じと怖い思いがしました。僕が、一番許せなかったのは、その川の橋の上で「原発は日本にとって必要だ！」と、若い人やおじさんが大声で叫んでいたことです。

なぜ、原爆が落ちた日に、原爆が落ちた場所で、そんなことが言えるのか理解に苦しみました。僕には、わかりません。

原発事故で、福島の人は今も苦しんでいて、僕が生まれるずっと前に落ちた原爆のせいで今も苦しんでいる人がいるのになぜ、あんなことが出来るのかと思うと、悔しいような腹が立つような、何とも言えない思いがしました。

僕は、平和しか知らないけど戦争は絶対嫌です。戦争が世の中から無くなりますように、と思って広島での御ミサで祈りました。

巡礼に参加させていただいて本当にありがとうございました。

ウォルフガング・(アッシジの) フランシスコ 中一 男子